

東ドイツ軍と警察がベルリンの壁を築き始めた1961年8月13日は、ドイツ分断を象徴する日とされている。壁は、東ドイツの共産党員の間では「反ファシズムの防護壁」と呼ばれていたが、実際は、東西の人々を離ればなれにし、家族を引き裂く存在だった。

### 東ドイツ育ちの牧師の娘

いるのである。アンゲラ・メルケルという名前は、すでにドイツ内外でよく知られているが、その「人となり」は謎めいている。旧東ドイツでは「西ドイツ人のようだ」と評される一方、旧西ドイツでは「いかにも東ドイツ人らしい」という評価もある。しかし彼女が、コール政権によって実現されたドイツ再統一を象徴する政治家の一人であることは確かだ。東西ドイツの分裂は、戦後両国に暮らした多くの人々にとつてと同様、メルケルの前半生にとつても、重大な影響を及ぼした出来事だったからだ。

そのころ、少女アンゲラは、東ドイツ東部・ブランデンブルク州ウツカーマー郊外の町テンプリンのホルスト・カスナー牧師の家に暮らしていた。8月13日の朝、教会で父のカスナー牧師が説教しているのを聞きながら、(西ドイツ北部の)ハンブルク出身の母が自分の横に座って泣いていた、とアンゲラは振り返る。これが、後のドイツ首相にとつての、最初の政治的な出来事の記憶だった。その少女、アンゲラ・ドロテア・カスナーは、ライプツィヒ大学で物理学を学んだ同級生で、最初の夫となったウルリヒ・メルケルの姓を用いているため、公の場ではアンゲラ・メルケルという名で呼ばれている。それでは彼女は、どのような政治的信条を持つ人物なのだろうか。東西ドイツ分裂の影響や、牧師の家に生まれ東ドイツに暮らしたことなどから、メルケルのパーソナリティーのさまざまな点が説明できる。彼女は54年、西ドイツのハンブルクに生まれたが、3週間足らずで両親とともに東ドイツ・ブランデ

ンブルク州のプリグニッツに引っ越した。ハンブルクで神学を学んだ父ホルスト・カスナーが、プリグニッツ近郊の人口3000の村クヴィットォウに最初の職を得たためである(3年後、彼は家族とともにウツカーマークへ引っ越している)。メルケルが生まれた1954年初めの5カ月だけで、およそ18万人が、社会主義に基づく「労働者と農民の国」東ドイツから脱出したと言われる。このため、一見すると、カスナー一家の移住は不思議なことのように思われる。しかし、東ドイツではキリスト教と教会組織は、保守反動的で小市民的な社会秩序の残滓とされ、牧師が絶対的に不足していた。そのため、西ドイツから東ドイツに向かう聖職者が、少数ながら存在したのだ。58年、父ホルストは、プロテスタント牧師のための専門学校と教理研究センターを兼ねた「パストラルコレグ」という施設をテンプリンに設立した。しかし、後にカスナー牧師は「赤いカスナー」と呼ばれるようになる。東ドイツ指導層に

# 初の女性首相誕生 メルケルが挑む ドイツの舵取り

ゲルト・ラングート  
ボン大学教授

9月22日、ドイツに女性首相が誕生した。政権基盤は、キリスト教民主同盟(CDU)と旧与党・社会民主党(SPD)の「大連立」。7年に及んだシュレーダー政権を引き継いだアンゲラ・メルケル首相の人物像を報告する。

## ア

ンゲラ・メルケルとは何者だろうか。彼女は、ベルリンの壁が崩壊した1989年に35歳だった。しかし、今では消えてなくなった「ドイツ民主主義共和国」(東ドイツ、DDR)に住む牧師の娘だったこの女性が、灰燼の中から不死鳥のようによみがえることになる。崩壊しつつあった旧東ドイツで政治運動に参加した1年後には、国会議員選挙に当選。ヘルムート・コール首相(当時)によって女性・青少年問題担当の大任に任命されることになる。そして彼女は、今やドイツ史上初の女性首相になろうとして

協力的な牧師たちが集まり、国家公安局の影響下にあるヴァイセンゼー研究会の会員となったためである。カスナー家が、このことから、とても政治的な存在だったことは疑いえない。

アンゲラ・メルケルは、本人の述懐によれば、全体的に楽しい青春時代を過ごしたという。しかし彼女は、無神論の国・東ドイツで、牧師の娘という存在は、先生にも、ドイツ社会主義統一党（SED）が規定する「労働者階級」出身の同級生にも色眼鏡で見られてしまうということに、かなり早い段階で気づいていた。

ところがこうした状況も、彼女にとって最終的な不利にはならなかった。とりわけ、英語とラテン語の教師でありながら、牧師の妻ゆえに東ドイツで教師となったり公職に就いたりすることが実質上禁止されていた母ヘルリンドに、「『労働者の国』では、牧師の娘は労働者階級の子より成績がよくなければ、大学に入ることができない」という処世訓を聞かされていたからである。

こうして、他の者より優秀な存在でなければならぬという意志が、幼いアンゲラの意識の中にもあった。恩師の一人によれば、学校での彼女は「並はずれた出来」「理想的な生徒」だったという。アンゲラは、運動の時間を除いて、ほとんど全ての科目で素晴らしい成績を残した。しかし、彼女はネガティブな意味での「点取り虫」ではなく、クラスメートにカンニングさせたこともあったという。

## ドイツ統一と政治家転身

子供時代のメルケルは、「目立ったことをして失敗してはいけない」という両親からの第二の教えに忠実で、どちらかといえば目立たない存在だった。最初の教えと関連するが、今の政治家としての彼女にとっても役立つ教訓となっているのは、個人的な志向と公式の政治活動を区別する、という原則である。こうした体験を通して、アンゲラは「策略と裏切り」と言われる政治の本質を、折に触れ

て学んだ。そのため、彼女は今でも、自分の内面を分析されたり、私生活に立ち入ってこられたりすることをとても嫌う。彼女は、自らのことを語ったり、心中を打ち明けたりしたりすることについては、口を閉ざしがちである。

ライプツィヒ大学で物理学を学んでいたときも、ベルリンの科学アカデミーに在籍していたときも、アンゲラ・メルケルは、仕事熱心で、仲間思いだと思われていた。控えめで内気だが、生きる喜びに満ちた人物だった、と当時の彼女を振り返る人は多い。

しかし、こうした研究生活時代の恩師や同級生、同僚たちは、誰も彼女に政治的指導力があるとは気づかなかつた。しかし、彼女自身はこのことを明らかにするのを渋ったのだが、学生時代から研究者時代、さらに科学アカデミー在籍時にかけて、ずっと自由ドイツ青年同盟（FDJ）ドイツ社会主義統一党の青年部）の単なる会員ただだけでなく、常に指導的立場にあつたという。

メルケルは、科学アカデミーにおいて、FDJのアジテーションとプロパガンダの責任者だったという主張を強く退けて、自分は単に観劇のような楽しい催し物を準備しただけだったとしている。確かにFDJへの加入は、東ドイツの若者にとつて逃れられないものであり、大学入学のために必要な前提条件の一つだったことは確かだ。

こうしてメルケルは東ドイツ社会に政治的にも順応した。しかし、東ドイツの若者たちに人気があり、彼女も聴いていた社会派シンガーソングライター、ヴォルフガング・ビアマンの国籍剥奪事件があつた76年には遅くとも、彼女も家族も、東ドイツ社会を批判的に見ていたに違いない。例えば、彼女のライプツィヒ大学の卒業試験で、試験官だった人物がそうした見方を示している。しかし、ささいなことであっても、彼女は東ドイツ当局に対して真剣で挑発的な行動はとらなかつた。

89年末、クリスマス前のことだが、東

ドイツ当局から政治活動の制限を受ける恐れがなくなつて初めて、メルケルは政治活動を始めた。彼女はまず、東ドイツの社会民主主義政党SDP（現SPD）ドイツ社会民主党に合流）に加わつた後、12月半ばには、支持層の広がりを見せつたあつた「民主的出発」（DA）という政党に入党した。DAは数カ月後、初めて自由投票が可能になった東ドイツ最後の人民議会選挙で、東ドイツ国内でCDUとともに「ドイツのため同盟」を設立し、選挙戦を戦つた。

メルケルは、この選挙での当選後、よく知られているように、あつという間にキャリアを積んだ。すなわち、最後の東ドイツ政府スポークスマン代理を経て、90年12月には統一ドイツの連邦議会議員となり、数週間後には、女性・青少年問題担当の連邦大臣に、そして環境大臣に任命され、さらにCDU書記長、党首、会派代表にもなつた。

CDUにとつて歴史的な転換点となつたのは、1999年12月22日付の「フラ

ンクフルター・アルゲマイネ」紙に掲載された、「CDUはヘルムート・コール名誉代表（元首相）当時）から自立するべきだ」と促す記事だった。この記事が、メルケルがさらに党首へと上り詰めるための基盤となつた。

## 冷静で合理的な科学者

それにしても、彼女はなぜこれほど急速に地位を駆け上つたのだろうか。理由の一つは、彼女が子どものころ両親から教えられたとおり、何でも粘り強く最大限の力で努力する性格の人物だったということだ。結局、コール元首相やシュレーダー前首相が持つているのと同様の権力を求める絶対的意志は、ほかの誰よりも最上の者でありたいというメルケル自身が追い求めた意思の結果だった。

メルケルは、根っからの政治家のように「ポリタホリック」（政治熱心・政治中毒）で、権力行使のとりこになつていく。時には孤独になることもあるかもしれないが、1週間のうち7日間、24時間、

政治こそメルケルの暮らしそのものである。

また、メルケルの行動様式でとりわけ重要なのは、合理的でアグレッシブな仕事ぶりだ。「歴史家」コール元首相とは対照的に、メルケルは特別なイデオロギーや歴史的な固定観念を持たない科学者、ジェネラリストである。彼女は、人生の中で重要な決断の瞬間であつても、冷静に理性的に、長所と短所を慎重に比較検討する能力を示してきた。これを彼女は次のように言い換えている。「決定的な場面で重要なのは勇気だと思えますが、私の場合、決断して動き出す前にかなりの熟考が必要ですね。可能な限り、時間をかけて考えるようにしています」。

彼女は、効率的な（ほとんど機械的でさえあるような）社会的機能が必要であることを自らの政治の前提としている。しかし同時に、長く受け継がれてきた経験や行動様式など、自然科学的で合理的に考察しにくいことの重要性を過小評価することがある。将来についての固定的

なイメージにとらわれずに、効率的な基準にのっとって具体的な問題を一つ一つ解決するのがメルケルのやり方である。

このため、よく目にする、原理原則に固執し価値規範を重んじ、ゆつたりとした外見の典型的なCDU政治家の一般的なイメージとは違って、彼女は「現代的な政治家」というイメージにびつたりである。結果、党内の伝統的な派閥関係からは疎遠になり、かつて、「鉄の女」と呼ばれ、自然科学の専門家だった英国首相マーガレット・サッチャーを引き合いに出されて、「氷のように冷たい」人物だとしばしば評された。

さらに、メルケルが目指しているのは、東ドイツに現に存在した社会主義の体験、つまりマルクス・レーニン主義を基にした東ドイツでのように経済的に窮乏し、レトリック的に退廃したイデオロギー的価値基準を過度に重視する社会とは対極にある。彼女は、こうした基準に基づいて、個人的な自由や責任といった概念を重視している。

ボンが首都だった時代に西ドイツに広がった、伝統的な「ライオンラントの資本主義」は市民に無理な要求をあまり突きつかなかつたが、メルケルの考え方の基礎はそれとも違う。彼女が耐え忍んだ社会主義とは全く正反対の、むしろ経済自由主義的で、カトリック的な社会的自尊心に基づく社会が、彼女の思想的土壌にはある。

つまり、彼女はむしろ、「効率性を物差しとした市場経済を作る」という経済政策についての堅い信念を持っている。決然とした変化を求めるメルケルの主張は、CDUの一部支持者、とりわけバイエルン州の地方政党内でCDUの姉妹政党・キリスト教社会同盟(CSU)の主張と、ときおり衝突することになる。

## EU外交に変化？

メルケルの政治的キャリアは、ドイツの再統一過程とともにあったので、彼女はドイツ統一を、「平均的な一市民」としてではなく、最初から「上から共に形

づくる者」、つまり政治家として体験した。彼女は、東ドイツ人の一人として独裁を経験した一方で、西ドイツ人のような論理的な考え方も身につけている。メルケルが成功した秘密の一つには、ひたすらたゆまず目標を目指す努力と権力への意志があつたが、これは少し過小評価されているだろう。多くの人々にとっては今なお、メルケルが「コールの秘蔵っ子」から豪腕政治家へとたくましく成長したのは驚くべきことだと思われている。こうした素晴らしい学習能力がメルケルの特徴でもあるが、彼女は、政治の危険性や誘惑の理解度についても、ドイツの女性政治家の中で類のないほど自覚している。

メルケルは、ベルリンのフンボルト大学で量子化学を教えるヨアヒム・ザウアー教授と再婚しており、子どもはいないでも、彼女には、連邦首相の才能があるに違いない。確かに、今までの新たに政権を担当した首班指名者のときのように、最初の数週間や数カ月は混乱が起きるか

もしれない。しかし彼女は、内政でも外交政策でも、旧西ドイツのニーダーザクセン州首相としての地方政治の経験しかないまま98年に就任したシュレーダー前首相と比べても、準備は万端だ。

彼女は、国の環境大臣として、国連の「ベルリン会談」を指揮しただけでなく、京都議定書についても、さまざまな点にわたって詳細に取り組んだ実績がある。野党党首時代には、(EU議会における保守系統一会派) 欧州人民党(EVP)の枠組みの中で、ヨーロッパ全体にまたがる政策にも集中して取り組み、影響力を発揮した。

彼女は、シュレーダー前首相とフランスのシラク大統領とのような強固な首脳間の交友関係を持たない。しかし彼女は、しばしば明らかにしているが、25カ国からなるEU(欧州連合)における大国の首脳だという考え方を否定している。彼女は、EUの中小加盟国と大国の亀裂をこれ以上大きくしたくないと考えている。彼女は、外交の表舞台に立つプレ

ーヤーの一人としても、なんとか目標達成のために努力し続けるという長所を発揮しようとするだろう。

メルケル新首相は、どんなに小さくてささいな課題であつても、喜んで自制して取り組み、かつて模範的な生徒であつたときのような優秀さを、政治的課題に深く精通した内閣首班として、身をもって証明してくれるだろう。とにかく、儀式的で古めかしい「男同士の友情」がシュレーダー前首相とブーテン・ロシア大統領の間には成立したが、メルケル首相との間には成り立たないことだけは確かだ。(訳者⇨パーテン・テュラ Parthen Thyra)

Georg Languth (ゲルト・ラングート) 1946年生まれ。連邦議会議員、ベルリン市幹部、欧州委員会ドイツ代表などを歴任。現在、ボン大学教授(政治学)。2006年9月、Deutscher Taschenbuch社から、400ページにわたるアンゲラ・メルケル次期首相の伝記『Angela Merkel』を出版。ほかに『Das Innenleben der Macht: Krise und Zukunft der CDU』など。

